清明なる光からの、あたたかな照らし

加藤　愛美

「宮本先生の本って難しいのよね。もう本当に難しい。哲学用語や宮本語がいっぱいだし、訳がわからないわけ。でも繰り返し読んでみると、よくわからないけど、何かすごいことが言われているのでは、という気がしてくるの……」

こうした言葉を今まで何度耳にしたことだろう。最初のころは、編集者として、読者にわかりやすい文章にすることが務めである私への叱咤なのかと受け止めることもあった。しかし、よくよく伺ってみると、どうやら違うらしい。ようはそれらの言葉にこめられているのは、先生のご文章には私たちにも計り知れない何か――何かすごいこと――が言われている、ということなのだ。

宮本先生のご文章に秘められているもの、一体それは……。

「上智大学での教え子さんでもあり、宮本先生の本の編集をされた経験から、個人的なエピソードや先生のお仕事に対する応答のようなエッセイを」との過分なお言葉と機会をいただいたとき、感謝のおもいと同時に、「ああ、何と難しいことだろう」と正直おもった。

諸先生方、教え子さまや編集者の方々……、そうした、私などよりお付き合いが長く、よくよく先生をご存じの方を前にして、いったい何をお書きすればよいのだろうか、と。

途方にくれながら、とりあえず『他者の風来』のゲラ（校正刷り）を職場の棚の奥から引っ張りだしてきた。

もしかすると、この本ぐらいかもしれない。担当させていただいた本で、ゲラを残してあるものは。これまでにも編集者としてさまざまな本づくりに携わらせていただいたが、なぜかこの本のゲラは何年経っても残っている。

この本はそのぐらい想い入れがある作品なのだ、と過去の自分に言い聞かされているおもいがした。

鉛筆と赤字がところ狭しと入り乱れるゲラ。そこには、著者と編集者との間で繰り広げられる真剣勝負の痕跡が

残っている。

なかには思わず頬がゆるんでしまうものもある。

こちらが入れた鉛筆が乱筆過ぎて、先生は解読することがおできにならなかったのだろう、「?」という朱が入っている。また、私があまりに見当違いなことを書いたのだろう、少々お強い筆跡で「ママ」(「このままで」の意)とある。

しかし何よりも、こちらからの(ときに大分的外れな)質問などにも一つひとつ丁寧にお答えくださっているところに、先生の柔和さがあらわれている。

ゲラを眺めていると、数おおくのことを思い出す。

懐かしい四ツ谷の研究室に足しげく通い、洋の東西を問わぬ本や林立する資料に圧倒(むしろ圧迫)されつつ、ご著書の構成や表現についてよくお話ししたものだった。先生がいつもご用意くださっているお抹茶やお菓子をいただきながら。

先生と、何もかもが及ばない私との会話は、落語でいうところのご隠居さんと与太郎のそれだった。しかしどんなに小さなことでも、先生はこちらが理解できるまで辛抱強くご説明くださるのだった。

〝公式〟打ち合わせの後は、チーズや赤ワインを交えながらの〝非公式〟打ち合わせ。むしろそちらの時間のほうが長かったかもしれないが、多くのことを学ばせていただく、たのしさと静謐さにみちた豊かなときであった。

ほどよくリラックスするからなのか、in vino veritasとのことわざのごとく、〝非公式〟でのほうがよい智慧やまことが与えられたものでしたね、先生。

ご原稿を読み進めさせていただくなかで、幾度、図書館に赴き、どれだけの事典や資料にあたったことだろう。調べものが多く、自分の頭もついてゆかないため、一日にゲラを十ページすら進められないこともあった。だんだんと自分の能力と時間への焦りが募り、追い詰められていくことを感じた。

しかも宮本先生は、著者校で半端ない量の赤字を入れていらっしゃる(先生のご原稿を編集されたことがある方は、よくご存じのことでしょう……)。先生ご自身もふしぎな笑顔で「廣松渉がそうだったように、私は著者校でバンバン朱を入れますからね」とおっしゃるように。編集者泣かせ

の著者かもしれない。

覚悟はしていたものの、先生から戻ってきたゲラを拝見した瞬間、その赤字の多さに正直なところ絶句した。そのゲラを見た職場の先輩も「うぎゃあー！」と一言。自分をはげますために、「朱（主）われを愛す」と、賛美歌をもじった駄洒落をつぶやいたものの、まったく笑えない。思わずゲラを見なかったことにして、つかの間の、微妙な沈黙を味わった。

栄誉ある、私の仕事の最遅記録を見事に樹立した『他者の風来』。その記録はいまもなお破られていない。

しかし、長い時間をかけられるということは、恵みでもあった。

一つのご原稿にじっくりと携わっていると、著者がおっしゃろうとすること、指し示そうとなさることが、おのずとわかってくる。そして、はじめは遠くかすかであったその息づかいが、だんだんとはげしく迫ってきこえてくるようになる。

先生の調べにひびくことば一つひとつのなかには、おそらくご自身でさえ、なぜこのようなことばが紡がれてゆくのかを理解する間もなくこの世に生み出されたものもあることを感じた。

まるで、何者かが指し示すがままに筆を動かす絵描きが染めてゆく、カンバスがごとくに。

そういえば、宮本先生のゲラに関することで、もう一つ別の思い出がある。

私が人生で初めて触れた「ゲラ」は、先生の『他者の甦り』のものだった。

まだ学生だったとき、先生が数人の院生にゲラの素読みをお願いされたことがあった。ゲラが渡されてから数日の後、先生と、お手伝いをさせていただいた数人が集ってゲラを突き合わせ、みなそれぞれに疑問点や文字の修正案などを述べていった。

そのときも、不勉強な私は、今となっては蓋をしておきたいような恥ずかしいことを申し上げてしまったのだった。先生のゲラに「出来する」という言葉があった。その言葉を見慣れない私は（なぜ辞書を引かなかったのだ……！）、先生に「この言葉でよろしいのでしょうか」とおたずねしてしまったのだ。

すると先生は、青筋を立てることもなく「ああこれは、あまり使われない言葉だけれど、これでよいのですよ」とやさしくおっしゃり、さらにはその言葉がどのように使われるか、ということまでお話しくださったのだった。

そのときのことで併せて思い起こすのは、「『生まれ』と『生れ』など、もう少し用字用語を整えたほうがよいのではないでしょうか」とのご提案をしたとき、最初のほうは受け入れてくださったが、やがて「あなたは細かくみてくれるけど……。このままでいいです」と一言。

著者の方々とはことばに関するこうしたやりとりがよくあるものだが、互いに意見を述べ合いながらも書き手を尊重する、ということをやんわりとさとしてくださったのも先生だった。

実は、『他者の甦り』のゲラは、いまだに私の部屋の片隅で静かにその威厳を放っている。

編集とはいったい何なのだろう、自分は最初どのような気持ちで原稿というものに向き合ったのだろう……、そんなことを思い連ねるとき、私はときどきこのゲラをぼんやりと眺める。

するとそのゲラは、いつも私に初心を思い起こさせ、不思議とはげましを語りだす。

学生のころからかれこれ数年、先生とご一緒させていただくなかで、多くのことをおもう。

最もよく思いめぐらすのは、さまざまなメッセージを発信される先生のご意欲は、いったい何に由来するのだろうか、ということだ。なぜこのように、次々とことばが織りなされていくのか、と。

含蓄ある智識と思考がもたらすのだろうとのことはもちろんだが、先生を包みつつも奥にいます方、ときを超えた記憶、育たれたご環境やご自身の経験などから培われたもの、〝悪〟に対する怒り、そして深い孤独――そうしたものが一挙に逆噴射し、エネルギーとして放たれるのではないだろうか。

切ったら鮮血が噴き出てきそうな、すさまじいエネルギー。

そのエネルギー自体に私たちが直接ふれることはないだろう。しかし、エネルギーから発せられる清明なる光は、文字と文字とに豊かなあわいをひらきつつ、私たちを照ら

す。やがてその光によって私たちは何かへといざなわれ、何かと出会わされていることだろう。彼方なるもの、そして、私たちの内にあるものが照らし出されて、ひらかれてゆく。

そうしたことにより、私たちも、泉から湧く水がとうとうと流れゆくように、隣り人へ、そしてときとひろがりとを超えた他者へとその光をつないでいくのだろう。また、そうすることが求められているともおもえる。

先生のご文章の雲居から射すひとすじの光は、あしたに向かってほほえみつつ、光自身がおもいがけぬところで輝き続けていくことだろう。

あふれるいのちのなかで、限りないものへと両手をひろげながら。

新たな詩人よ
雲から光から嵐から
透明なエネルギーを得て
人と地球によるべき形を暗示せよ

（宮沢賢治「生徒諸君に寄せる」より）

ほとんどがたわいない思い出語りとなってしまったことにお詫びもうしあげつつ、先生のこれからの旅路が「言幸く、ま幸く」ありますよういのり、感謝をこめて筆をおくこととしたい。

追　先生、この場をお借りしてお願いごとがあるのですが……。

山川草木を愛され、文化のかおりをたずさえていらっしゃる先生。いつかぜひ、（私のような庶民にもわかる）随筆のようなものをお書きくださいませんか。

きっとそこでも本領発揮されることでございましょう（これは多くの方が希望されていることでございますので……！）。

そして、どうか（絶滅寸前とも言える）たましいのこもった「手書き原稿」をつらぬかれますように……！